

楽しかった修学旅行

三年 沢口よし子（昭和三八年度）

第十六回目の卒業生を送り、いよいよ最上級生となった私たちは、当時毎日のように、旅行だ旅行だとうれしい又楽しい気持ちで落ちつかなかった。しかし、卒業を目前にする今、それが最大の思い出として私たちの脳裏をかすめるのである。

今静かに修学旅行のことを思い起こしてみる時、飛島から酒田までの船旅の長かったこと、でも酒田港の灯台が見えた時は、何ともいえない気持ちだった。船から上陸して先生のお話を聞き、それぞれ親せき知人の家に別れた。十七日の朝五時半まで駅に集合、あとのきの皆の顔と顔は、嬉しさをかくしきれない様子だった。いまだにあの時の顔が浮かんできます。今野先生も見送りにきて下さいました。

私たちは誰も遅れずに新庄行き六時十九分発の汽車に乗り酒田を後にした。ほとんど汽単に乗る機会のない私たちには、車窓から目に入るもののすべてが、大きな喜びであり、又偉大な収穫でもあった。汽車は電柱を蹴散らし、数多の駅を後目に、宇都宮についた。宇都宮からは中禅寺までバスに乗った。途中大きな杉並木。車外は暗かったが、バスガイドの説明が印象的だった。イロハ坂を登る時は、バスが谷底におちて行きそうだった。やがて中禅寺についた。旅館の看板が目に入った。つたやホテルと書いてあった。こんな高い山の上に、何て立派な建物があるんだろう。只々驚くばかりであった。案内されて中に入っていくと、何百人もの生徒がいた。あの旅館の設備が大変よく整っていたことが。私には印象的だった。

朝になってからあの窓の外を見たときの湖ときたら、とても大きく、きれいにかすんで、また水の色もたくましく生きているように思えた。華厳の滝も見たけれど、水が少ししか流れていなかったのは予想外だった。けれども、あの大きな谷間がいかにいかめしく、こわいように見えた。東照宮にも行った。あの東照宮の構えと

いい、色どりといい、とても美しく、日暮しの御門の名にふさわしかった。日本にもこんなところがあるのかと思っただぐらいたらよかった。幸い天候にも恵まれ「日光を見ずして結構というなかられ。」と言われているが結構な幾多の思い出を抱いて日光から東京へと向かった。

上野についてから上野動物園に行った。いろいろな動物が沢山いた。その中でも、くじやくの羽根をひろげた姿はとても美しく印象的だった。あの動物園も広く、もういやというほど歩いた。夜は面会などでごった返した。

翌十九日はいよいよ東京見学というのに、雨に見舞われ、本当に惜しかった。あの日あの時、いい天気だったらなあ、今だに思われてならない。

国会に行っても学生でごった返していた。でも中に入り、赤いジュータンの上を歩いていると、なにか私も偉くなったように感じられた。あのジュータンを踏むことは。もう二度とないだろう。皇居なども緑の芝生がきれいだった。新鮮な空気がとてもよかった。三越に行った時は、あまり大きくてどこがどこかさっぱりわからないうほどだった。タワーにも行ったが、ここも大勢の人で賑わっていた。展望台まで登った。上からみ名東京、本当に自動車なども小さく、おもちゃのように見えた。世界一の塔だけあって、何からか今まで感嘆せざるを得なかった。

夜の東京を色どるネオンのあかりは、いまも目の前にちらつき、私たちの一層の憧れをそそるものがある。全ての見学予定を終え、上野駅に着いた頃は真つ暗になっていた。汽車がくるのを待って、あの広いプラットホームも行きずりの顔と顔。カチカチと響く靴音、何か名残り惜しいような気もした。

歌の歌詞にもあるように、あの曲は私たちがいつまでもいつまでも忘れぬようにと、「一度とかえらぬ思い出のせて……」とどんどんどんどん進み行く黒い煙の中に包まれた私たちは、二十二時楽しき多く胸に秘め東京を去った。